

平成30年9月5日発行(毎月5日1回発行)
第58巻9月号(通巻710号)

風土



9

ひとり米櫃穀象に隙みせず

(句集『高蘆』より昭和四十四年作)

この句を出されたことばだけでたどると「ひとり米櫃」は一人住まいの人物の米櫃と読め、「七畳小屋」の桂郎師の暮らしを垣間見ることになります。事実は席題で作った句で、桂郎師は病気をしない限り妻子のいる家で食事をしたと手塚美佐氏は書いています。ただしお酒は常に「七畳小屋」に置いてあったとも。席題とはいえ「穀象に隙みせず」とは律儀な一人住まいです。

筆休^{やすめ}花葛を見て足らひけり

(句集『高蘆』より昭和四十四年作)

さて「箸休め」とは言いますが、「筆休」とはいかなるものでしょう。「箸休め」は食事の途中に気分転換になるように作られた、ちよつとしたおかずやつまみのことです。これにちなんで、原稿執筆に疲れた目を遊ばせる(気分転換)のを「筆休」としたのです。小屋を取り巻く竹林の葛の花に目と心を休めているのです。

下駄をはくときの男や初嵐

(句集『能ヶ谷』より昭和五十六年作)

この句は桂郎師を失ってから六年目の作品です。桂郎師の「手前の顔のある俳句を作れ」意識しつつ桂郎師とは違う俳句をどう構築するか。六年も経ち少しゆとりも出てきました。この句がそのひとつの答えとなっています。「下駄をはくときの男」は境涯の個性を含んでいますが、より普遍的な解放感を伝えていきます。「初嵐」に佇む男は器師の自画像です。

朝顔や粥噴くまでを庭にをり

(句集『能ヶ谷』より昭和五十六年作)

この頃の器師の俳句は日常の一駒を詠みながら、人間の営みの普遍性を読み手に伝え、いわゆる親しみを覚ええます。境涯俳句の特性の貧困や病苦から解放された意識が根底にあります。朝の粥ができるまで庭を散策するだけの事柄ですが、このような暮らしの見える世界を掬い取り、句にすることが大事なのです。「朝顔」が生き生きしています。

水の如くに

南うみを

若狭
六句

はつなつの原子炉ドームいや白き

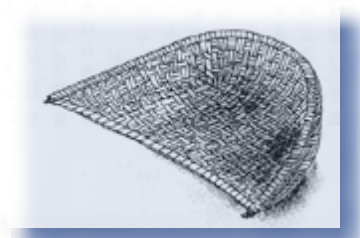
入れ食ひの鰹や原子炉温排水

原発の入江くらげのもう湧いて

皮はぎを煙草啣へつ糶り落とす

くわんおんと原子炉を抱き山滴る

原子炉は永久に眠らず夏の月
とうすみの飛ぶといふよりすべり来る
鯉の背を走り抜けたるあめんぼう
嘴におはぐるの翅はたはたす
くちなはの水の如くに巖すべる
玉葱の肌むんずと掴み抜く
蛭見のなまぬるき顔ひと撫です



竹間集

同人作品



風の径

田村すゝむ

山葵田の真白き花を紗で被ふ
チューリップ咲いて小人が出てきさう
一枚の朴の病葉降りて来る
雛げしの雛の辺りに風の径
今年また笛仕る夏まつり
閃きの言葉ノートに夏が来る
夏の夢覚むればそこに車椅子

薯の花

小林輝子

一山の粉かけしやう楡若葉
ゆふぐれのいろを保てり薯の花
すかんぽの花を手折りてをみな寂ぶ
水芭蕉啞へて熊の立ち上がる
南部近松の友遊く恋ふ友を迎へん白地着て
夏蕨胸まで濡らし摘みに摘む
生きてゐる余白に露の皮を剥く

白 緋

田中佐知子

あぢさゐの毬のむかうに勢至仏
あぢさゐの白ばかり咲きミサの朝
新じやがの真狩村よりどさり着く
臥牛垣おそるおそるのかたつむり
かはらけの消えて静もる五月山
読み返す『斜陽』に朧籐寝椅子
父遙か兄なほ遙か白緋

青 梅 雨

中村 洋子

青梅雨や器蔵書を賜りぬ
みずすまし己が水輪を引きづれり
他人めく写真の我や桜桃忌
八ツ橋に水明かりして花菖蒲
紫蘇を揉み生命線を濃くしたる
藤椅子の軋みの在りぬひとところ
百選の棚田をわたる夏の月

十 葉 の 花

橋添やよひ

十葉の花咲く隠れ切支丹
ミサ曲の洩るる教会花くちなし
南風吹くあらがふ葉裏の白さかな
みどりさす黄不動像の足の指
おのが影もろとも進む蟻の列
土乾く夏日となりぬ決闘地
夕端居俳句の鬼を身の内に

漢文の先生

浅田 光代

引き揚げの海や青嶺のただ青し
浦風や青唐辛子伸びにのび
漢文の先生甘党とてころてん
形代の重きが流れゆく水路
いきなりの夏越の雨となりにけり
峰雲や真水ぶつかげ船洗ふ
雨の輪のまだ見えてゐる青田かな

どぢやう汁

柿沼 盟子

一匹の蟻に戸惑ふ歩幅かな
時の日やいつせいに立つ昼休み
しつかりと花つく茄子の苗選ぶ
庭石の半ば埋もれて文字摺草
とうろり^星と箸にからみてどぢやう汁
ひと鉢の梔子の香のアーケード
洞奥に泉抱きて寺古りぬ

山河集

同人作品



南うみを選

波頭並べ若狭に来る首夏
上迂蒼人

白南風や岬の鼻を輝かし
ラムネ飲むレンガ倉庫の二号館
神木は楯の大樹や夏落葉
斜張橋青嶺引き合ひして真直ぐ

荒梅雨や海のうねりの鯨めく
下山田美江

麦秋や縄文土器に指の跡
錠剤の五種を日分くる峰の雲
舟伏して去り行く日々や月見草
アイロンのかけあるハンカチ祭来る

ほくほくと潰す新じやが離乳食
岡本 尚子

八つ月児歩行器自在や夏燕
「佃煮」の暖簾の奥の網戸かな

走り梅雨孔雀の檻に雀ゐて
北の地は熊も神なり星涼し

忌を修す梅雨満月に虹の暈
奥田 茶々
住職は剃髪中や梅雨晴間
あめんぼをあめんぼつつと跳び越せり

一粒が皿を逃げだすさくらんぼ
混浴のやうな熱気やビヤホール

捨て石にまがふ卵塔苔の花
川田 好子

十薬や祖母の繰り言そらんじて
父の日や文管にねむる肥後守
庭下駄のしめり蹠に梅雨に入る
天平の公達かくや杜若

風土独語／南 うみを



斜張橋青嶺引き合ひして真直ぐ

上辻 蒼人

「斜張橋」は吊橋の一種で、支点となる高塔から斜めに張ったケーブルで橋桁を吊っています。「青嶺引き合ひして」ですので、山と山との間に吊られていることが解ります。作者はたくさんのケーブルがピンと張られた様子を、「引き合ひして真直ぐ」と捉えました。この句は「吊橋」でなく「斜張橋」と置き、読み手の視覚に訴えたところが手柄です。

木道の百足虫にうわうさわうかな

平田きみこ

この句も前述の句と同様に「右往左往」を「うわうさわう」とひらがな書きにし、百足虫の出現にうろたえる様子を読み手に想像させています。視覚を利用した表現で成功しました。

麦秋や縄文土器に指の跡

下山田美江

「麦秋」と「縄文土器」とは直接つながるものはありません。しかしふたつが取り合わされると「麦秋」の頃の乾いた空気がざらざらした地べたやその色が「縄文土器」と重なってきます。また「指の跡」から古代の暮らしが目の前に飛び込んできます。

萍を揺らしては又潜るもの

高橋まき子

「萍」は、田や沼など夏になると水面が見えないほどびつしりと繁茂します。その薄を揺らしているものがありますが、姿を現しません。見えないだけに不気味です。作者は闇の世界が気になつてしかたがないのです。

走り梅雨孔雀の檻に雀ぬて

岡本 尚子

動物園での景です。この雀はどこから檻の中に潜りこんだのか。きつと金網の網目が大きかったたのでしよう。雀は雨宿りではなく孔雀の餌が目当てです。孔雀の戸惑う様子が見えます。

凸凹の地べたにあそぶ祭笛

山田 健太

最近は「地べたにあそぶ」子供たちをほとんど見かけなくなりました。ゲーム機など室内の遊びで事足りてしまったのです。でもこの句の世界は懐かしき昭和の子供たちであふれています。祭の笛の音に気もそぞろです。

混浴のやうな熱気やビヤホール

奥田 茶々

この句、「混浴のやうな」の比喩が言い得て妙です。ビヤホールを大きな湯舟に見立て、男女のにぎやかな声のやりとりから「混浴」を発想したのです。比喩は大胆なほど佳いです。

風土集



南うみを選

血管年齢十歳若し薔薇抱ふ

横須賀

平田きみこ

木道の百足虫にうわうさわうかな

夏薊薨は若き兵士の墓

父の日や掌の大きさは父譲り

梅雨明や空に木の香の漂ひて

むつちりと手首のくびれ天花粉

逗子

高橋まき子

母さんの背ナをはみ出す眺かな

まくはうり赤子の頭よく回る

萍を揺らしては又潜るもの

信号待つ橋のたもとの涼風に

描きぬてまことのびやかかぶと虫

水戸

山田 健太

踝を風の過ぎ行く青田かな

凸凹の地べたにあそぶ祭笛

かんばせにプールの水を押しつけて

冷蔵庫貼り紙だらけとなりにつけり

鳥声に雛もまじりて明易し

川崎

森田 節子

這ひ這ひの児が膝に来て金魚草

歩み初む三步の宙や花葵

熱の子の寝息しづまる麦の秋

鉢並ぶ二年三組茄子の花

いくばくを残す元号梅雨に入る

横浜

赤石 梨花

夏山の見え来て検札車掌ゆく

苔寺に見ばやと思ふ苔の花

地震あとの空の深さを夏燕

山蟻をあまた見し夜の赤き月

夏椿師は遠しとも近しとも

福生

雨宮 桂子

白南風や何突つ走る家の中

「オスプレイ・ノ」歯を剥き出しに雲の峰

明易し位牌に小さき花もやう

立葵またあたらしき色に会ふ